

マエストロ チョン・ミョンフン ヴェルディ『マクベス』を語る

このオペラは歴史上みられる非常に陰惨な命題、権力と権力への欲望にかかわるテーマを描いています。とても不快なドラマですが、人生のすべてがただ幸せで陽の当たるものとは限りません。ですからこの作品は暗い意味で高度にドラマティックな作品なのです。

ご存知のようにヴェルディはシェイクスピアの大ファンでした。ヴェルディは彼に魅了され、音楽人生の大きな部分を捧げました。『マクベス』はこれまで私たちが上演したヴェルディ＝シェイクスピア・オペラの2作品（2022年『ファルススタッフ』、2023年『オテロ』）よりもずっと初期の作品ですが、ヴェルディ自身は初期の自作の中で最高傑作と感じていたと思います。

ヴェルディは彼の芸術を刷新し続けました。ですから、初期のこの作品『マクベス』は宝石の原石と呼ぶこともできるでしょう。『ファルススタッフ』や『オテロ』のように洗練されてはいませんが、極めて質の高いダイヤモンドの原石だということができます。

この3つのオペラを通じてヴェルディの音楽人生の発展を追うことができるのはとても興味深いことなのです。

名誉音楽監督チョン・ミョンフン指揮東京フィル《オペラ演奏会形式》では2022年より、シェイクスピアの戯曲をもとにヴェルディが作曲したオペラ『ファルススタッフ』『オテロ』を続けて上演してきました。今回の『マクベス』で全3作上演が完遂となります。

第1004回オーチャード定期演奏会

9月15日(日) 15:00開演 Bunkamura オーチャードホール

第1005回サントリー定期シリーズ

9月17日(火) 19:00開演 サントリーホール

第164回東京オペラシティ定期シリーズ

9月19日(木) 19:00開演 東京オペラシティ コンサートホール

指揮：チョン・ミョンフン

マクベス：セバスティアン・カターナ(バリトン)

マクベス夫人：ヴィットリア・イエオ(ソプラノ)

バンクォー：アルベルト・ペーゼンドルフアー(バス)*

マクダフ：ステファノ・セッコ(テノール)

マルコム：小原啓楼(テノール)

マクベス夫人の侍女：但馬由香(メゾ・ソプラノ)

医者：伊藤貴之(バス)

マクベスの従者、刺客、伝令：市川宥一郎(バリトン)

第一の幻影：山本竜介(バリトン)

第二の幻影：北原瑠美(ソプラノ)

第三の幻影：吉田桃子(ソプラノ)

合唱：新国立劇場合唱団(合唱指揮：富平恭平)

コンサートマスター：近藤 薫

舞台監督：幸泉浩司、近藤 元(アートクリエイション)

舞台監督助手：小田原 築、堀井基弘(アートクリエイション)

照明：喜多村 貴(劇光社)

音響：オルフェオ

衣裳：東京衣裳

ヘアメイク：趙 英

小道具：アートクリエイション

字幕：本谷麻子

字幕操作：塩谷奈々(Zimakuプラス)

音楽スタッフ：古瀬安子、山中麻鈴

通訳：村上眞理(イタリア語)

※当初の発表から変更となりました。

オペラ演奏会形式

ヴェルディ： 歌劇『マクベス』(リコルディ／1865年パリ改訂版)

全4幕・日本語字幕付き原語(イタリア語)上演
原作：ウィリアム・シェイクスピア『マクベス』
台本：フランチェスコ・マリア・ピアヴェ、アンドレア・マッフェイ

第1幕 (約50分)

第2幕 (約30分)

— 休憩 (約20分) —

第3幕 (約20分)

第4幕 (約40分)

上演時間：約2時間45分(休憩含む)

主催：公益財団法人 東京フィルハーモニー交響楽団
助成：文化庁文化芸術振興費補助金(舞台芸術等総合支援事業(創造団体支援))|
独立行政法人日本芸術文化振興会
公益財団法人 三菱UFJ信託芸術文化財団(9/17公演)
公益財団法人アフィニス文化財団

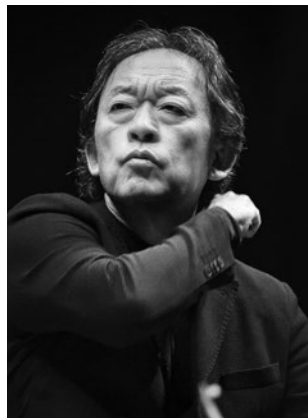
「音楽文化の担い手としてのプロ・オーケストラが主催する、わが国ならびに各楽団が活動の重点を置いている地域にとって意義がある企画」を対象としています。

後援：NPO法人日本ヴェルディ協会、日本シェイクスピア協会
協力：Bunkamura(9/15公演)



- ♪ 本公演は全席指定です。指定のお席にご着席ください。演奏開始間際の入場の際にはスタッフの案内で入場券記載とは異なる席への着席をお願いすることがございます。
- ♪ 演奏中のご入場は、かたくお断りいたします。楽章間のご入場は楽曲の進行によりスタッフがご案内いたします。入場いただけない場合もございますのでご了承ください。
- ♪ 曲間・楽章間での退場につきましては、体調に不安がある場合など、無理せずご判断ください。その際、周りのお客様の鑑賞の妨げとならぬよう、ご配慮いただければ幸いです。
- ♪ 演奏中に、時計やスマートフォンのアラーム音等が鳴らないよう、いま一度ご確認ください。
- ♪ 演奏は最後の余韻まで余さずお楽しみください。早すぎる拍手や声援は他のお客様の鑑賞の妨げとなる場合がございますので、ご配慮くださいますようお願いいたします。

出演者プロフィール



©上野隆文

指揮

チョン・ミョンフン

Myung-Whun Chung, conductor

東京フィルハーモニー交響楽団 名誉音楽監督

韓国ソウル生まれ。マンネス音楽学校、ジュリアード音楽院でピアノと指揮法を学ぶ。1974年チャイコフスキー国際コンクール ピアノ部門第2位。その後ロスアンジェルス・フィルにてジュリーニのアシスタントとなり、後に副指揮者。ザールブリュッケン放送響音楽監督および首席指揮者(1984～1989)、パリ・オペラ座バスターニユ音楽監督(1989～1994)、ローマ・サンタチェチーリア管首席指揮者(1997～2005)、フランス国立放送フィル音楽監督(2000～2015)。現在は名誉音楽監督、ソウル・フィル音楽監督(2006～2015)、シュターツカペレ・ドレスデンの首席客演指揮者(2012～)など歴任。1997年に本人が創設したアジア・フィルの音楽監督も務める。2022年6月、イタリア共和国功績勲章であるグランドオフィサーの称号を長年にわたるイタリアの文化発展への貢献に対して受勲。2023年3月、イタリア・ミラノのスカラ・フィルハーモニー管弦楽団として初めての名誉指揮者に就任した。

2001年東京フィルハーモニー交響楽団のスペシャル・アーティスティック・アドヴァイザーに就任、2010年より桂冠名誉指揮者、2016年9月に名誉音楽監督に就任。ピアニストとして室内楽公演に出演するほか、アジアの若い演奏家への支援、ユニセフ親善大使、アジアの平和を願う活動など多岐にわたり活躍している。



マクベス(バリトン)

セバスティアン・カターナ

Sebastian Catana, Macbeth (baritone)

ルーマニア生まれのセバスティアン・カターナは、同世代で最も興味深いヴェルディ歌手、そしてヴェリズモ・バリトンの一人として注目を集めている。2001年カーネギーホールでの『ユグノー教徒』トールでオペラ・デビュー、2003年D.オーレン指揮『ラ・ボエーム』ショナールでMETデビュー。同劇場ではその後も様々な作品に出演。2007年、ボローニャ市立劇場『シモン・ボッカネグラ』パオロで欧州デビュー。『トスカ』スカルピア(オペラ・バステューユ)、『カヴァレリア・ルスティカーナ』アルフィオ／トニオ(ヴェローナ、伊カリアリ等)、『ラ・ジョコンダ』バルナバ、カゼッラ『蛇女』デモゴーゴン(トリノ)、トゥティーノ『二人の女』欧州初演(カリアリ) ジョヴァンニなどのほか、『アイダ』『マクベス』『ナブッコ』『椿姫』『リゴレット』『イル・トロヴァトーレ』『オテロ』『ファルスタッフ』といった数々のヴェルディ作品でタイトルロールを含む主要な役で出演。欧州はじめ中東、南米を含む世界各地で活躍しており、今後もこれらの作品で更なる登場が予定されている。チョン・ミョンファン指揮東京フィルには2022年『ファルスタッフ』以来2回目の登場となる。



マクベス夫人(ソプラノ)

ヴィットリア・イエオ

Vittoria Yeo, Lady Macbeth (soprano)

韓国ソウル生まれ。ソウル・西京大学校を経てイタリアに渡り、パルマのアッリーゴ・ボーイト音楽院、シエナのキジャーナ音楽院を経てモデナのヴェッキートネッリ高等音楽学校でライナ・カバイヴァンスカに師事し最高の成績で卒業。2015年R. ムーティ指揮『エルナーニ』エルヴィーラでザルツブルク音楽祭デビューし国際的なキャリアをスタート。2017年に同音楽祭『アイダ』でタイトルロールを演じた。ほかに『マクベス』マクベス夫人、『蝶々夫人』タイトルロール、『コジ・ファン・トゥッテ』フィオルディリージ、『トゥーランドット』リユー、『イル・トロヴァトーレ』レオノーラ、『ラ・ボエーム』ミミ、『アイダ』『ノルマ』タイトルロール、『オテロ』デズデモナなど出演多数。ソリストとしてはアレーナ・ディ・ヴェローナにてモーツァルト「レクイエム」(2020)、R. ムーティ指揮シカゴ響ヴェルディ「レクイエム」(2018)に出演したほか2019年にはバーデン・バーデン音楽祭にてベルリン・フィルと、2022年にはブルゴス大聖堂でマドリッド王立劇場の中心メンバーと共演している。チョン・ミョンファン指揮東京フィルには2016年『蝶々夫人』以来2回目の登場となる。

9/15

9/17

9/19



バンクォー (バス)

アルベルト・ペーゼンドルファー

Albert Pesendorfer, Banquo (bass)

オーストリアのバス歌手アルベルト・ペーゼンドルファーは、ドイツ系レパートリーを得意とする歌手の中で最も人気を集めるひとりである。世界各地の劇場や音楽祭に出演する彼の音楽性の多様さはイタリアやスラヴ系の作品でも高く評価され、ワーグナーやイタリア系の作品を中心に70以上の役をレパートリーとしている。ウィーン楽友協会、ウィーン・コンツェルトハウス、ベルリン・フィル、ロンドンのバービカン・ホールをはじめ日本や米国でも活躍。2016/2017年には新国立劇場『ワルキューレ』フンディング、『神々の黄昏』ハーゲンとしても出演した。2024/2025シーズンのハイライトとして、東京フィルハーモニー交響楽団とのヴェルディ『マクベス』（バンクォー）、ボローニャ市立歌劇場での『ワルキューレ』（フンディング）、東京交響楽団との『ばらの騎士』（オックス男爵）、『アラベラ』（ヴァルドナー伯爵）、ベルリン・ドイツ・オペラでの『ニュルンベルクのマイスタージンガー』（ファイト・ボーグナー）が予定されている。現在、ベルリン芸術大学で声楽教授も務めている。



マクダフ (テノール)

ステファノ・セッコ

Stefano Secco, Macduff (tenor)

イタリア・ミラノ生まれ。アルベルト・ソレジーナにピアノと歌を学び、フランコ・コレリ、フランカ・マッテウッチ、レイラ・ジェンチェル、レナータ・スコットに師事した。イタリアのすべての主要な歌劇場に登場しており、ボローニャ、パルマ、ローマでは『ラ・ボエーム』ロドルフォ、トリノとフィレンツェでは『リゴレット』マントヴァ公爵、ローマでは『蝶々夫人』ピンカートン、ミラノ・スカラ座では『椿姫』アルフレードおよび『マクベス』マクダフとして出演。最近の出演には、ウィーン国立歌劇場『ウェルテル』『トスカ』、サレルノでの『ランメルモールのルチア』、ヴェネツィアでの『マクベス』『椿姫』、ミラノ・スカラ座とアルジェでのニューイヤー・ガラ、ナントとレンヌでの『仮面舞踏会』、ニースでの『ファウスト』、トリエステでのロッシーニ「スターバト・マーテル」、伊バリーでの『ラ・ボエーム』、マルセイユ『ルイザ・ミラー』など。パッパーノ指揮ロンドン響とのダッラピッコラ『囚人』、パドヴァ・ヴェネト管弦楽団によるプッチーニ『ロマンツェ』オーケストラ版世界初演、メッシーナでの『トスカ』『ノルマ』、ボローニャ市立歌劇場での『シチリアの晩鐘』などがある。

9/15

9/17

9/19



マルコム (テノール)

小原啓楼

Keiroh Ohara, Malcolm (tenor)

東京藝術大学卒業、同大学院修了、博士号取得。新国立劇場『沈黙』ロドリゴ、『オテロ』カッシオ、日生劇場『リア』エドマンドの他、ロームシアター京都及び二期会『フィデリオ』フロレスタンでの力強い歌唱が絶賛を浴びる一方、新国立劇場『夕鶴』与ひょうにおける繊細な日本語歌唱も美しく、高い評価を得ている。同役では、外務省主催「ロシアにおける日本年」に参加、マリンスキー劇場でも演じる等国内外で活躍。二期会およびわ湖ホール『ローエングリン』タイトルロールも好評を博した。オーケストラ・コンサートでも、モーツァルト、ロッシニ、ロイド＝ウェバー等の「レクイエム」、ロッシニ、ドヴォルザークの「スターバト・マーテル」、ベートーヴェン「第九」、ブリテン「戦争レクイエム」等古典から現代作品までレパートリーも幅広い。愛知県立芸術大学教授。二期会会員。



©FUKAYA Yoshinobu/auraY2

マクベス夫人の侍女 (メゾ・ソプラノ)

但馬由香

Yuka Tajima, Lady-in-Waiting to Lady Macbeth (mezzo-soprano)

武蔵野音楽大学卒業、同大学大学院修了。第50回日伊声楽コンクールソ入選。第31回飯塚新人音楽コンクール第1位。藤原歌劇団には、『ラ・チェネレントラ』のティーズベでデビュー以降、『どろぼうかきさき』ピッポ、『カルメル会修道女の対話』シャルレ修道女、『セビリャの理髪師』ベルタ、『ノルマ』クロティルデ、『蝶々夫人』スズキ等の諸役で活躍。2018年には『ラ・チェネレントラ』のアンジェリーナでロールデビューし好評を得た。その他、新国立劇場『夏の夜の夢』ハーミア、『蝶々夫人』同役、『カルメン』メルセデスで出演。また、「第九」「メサイア」、ペルゴレージ「スターバト・マーテル」、ヴィヴァルディ「グローリア・ミサ」、モーツァルト「レクイエム」「戴冠ミサ」等、宗教曲のソリストとしても活躍している。藤原歌劇団団員。

9/15

9/17

9/19



医者 (バス)

伊藤貴之

Takayuki Ito, A Doctor (bass)

名古屋芸術大学首席卒業、同大学大学院修了。渡伊
シミラノで研鑽する。第39回イタリア声楽コンクール金賞、
G. ゼッカ国際声楽コンクール第2位など受賞多数。留学中、
『ラ・ボエーム』コッリーネ等多数のオペラに出演。新国立
劇場には、開場25周年記念公演『アイダ』国王、『ホフマ
ン物語』ルーテル／クレスベル、日生劇場には『メデア』クレオンテ、『セビリアの理髪
師』バジリオ、第60回大阪国際フェスティバル『泥棒かささぎ』ゴットルド、藤原歌劇
団公演『ファウスト』メフィストフェレス等で好評を博す。小澤征爾、秋山和慶、尾高忠
明、チョン・ミョンフン、アルベルト・ゼッダ等著名指揮者との共演も多く、「第九」やヴェ
ルディ、モーツァルト「レクイエム」などで活躍している。平成24年度愛知県芸術文化
選奨『文化新人賞』、平成29年度豊田文化奨励賞受賞。藤原歌劇団団員。



マクベスの従者、刺客、伝令 (バリトン)

市川宥一郎

Yuichiro Ichikawa,

Servant of Macbeth/Murderer/Herald (baritone)

昭和音楽大学卒業、同大学大学院修了。第57回日伊声
楽コンクール第1位。2016年昭和音楽大学とソウル市立大
学校の交流事業にてソウル市でのコンサートや、2017年文
化庁委託事業次代の文化を創造する新進芸術家育成事
業『披露演奏会 オペラ・アリアコンサート』にM. デヴィーアの推薦で出演。藤原歌劇
団には2018年『ラ・チェネントラ』のダンディーニでデビュー以降、『蝶々夫人』シャ
ープレス、『カルメン』エスカミーリオ、『ラ・ボエーム』ショナール、『イル・カンピエッロ』アスト
ルフィで出演し、いずれも好評を博している。日本オペラ協会には、2023年『源氏物
語』の朱雀帝で出演。2023年、小澤征爾音楽塾公演『ラ・ボエーム』のショナールで
抜擢され評価を得るなど、これからの活躍が期待されている新進バリトン。藤原歌劇
団団員。



第一の幻影 (バリトン)

山本竜介

Ryusuke Yamamoto, Apparition 1 (baritone)

昭和音楽大学音楽学部声楽科、同音楽専攻科修了。(公財)日本オペラ振興会オペラ歌手育成部修了。『ランメルモールのルチア』『椿姫』『リゴレット』『仮面舞踏会』『イル・トロヴァトーレ』『アイダ』『ラ・ボエーム』『蝶々夫人』『トスカ』『道化師』等出演。イタリア留学中『アイダ』『アモナズロ』『愛の妙薬』ベルコーレなどミラノを中心にさまざまな演奏会に出演。兵庫県新人演奏会、モーツァルト、デュルフレ「レクイエム」にてバス・ソロを務める。藤原歌劇団、新国立劇場合唱団メンバー。



第二の幻影 (ソプラノ)

北原瑠美

Rumi Kitahara, Apparition 2 (soprano)

東京藝術大学卒業、同大学院修了。二期会オペラ研修所を首席で修了。その後イタリアにて研鑽を積む。これまでに『フィガロの結婚』伯爵夫人、『ラ・ボエーム』ミミ、『魔笛』侍女、『三部作』ジョルジエッタ／アンジェリカなど多くのオペラに出演する他、ミュージカルでも活躍。近年では東京・春・音楽祭『マクベス』(リッカルド・ムーティ指揮)にて侍女役、二期会公演『午後の曳航』(ヘンツェ作曲)房子役などで出演。その演技力でも高い評価を得る。



第三の幻影 (ソプラノ)

吉田桃子

Momoko Yoshida, Apparition 3 (soprano)

岐阜県出身。国立音楽大学演奏学科声楽専修卒業。卒業時に優秀者のみ選抜される平成25年度卒業演奏会及び、第36回読売中部新人演奏会に出演。二期会オペラ研修所修了。第60期修了生・成績優秀者による「二期会新進声楽家の夕べ」に出演。これまでオペレッタ『天国と地獄』キューピッド、『タンホイザー』牧童、『魔笛』童子1に出演。コンサートではブラームス「ドイツ・レクイエム」のソリスト、「STAND UP! CLASSIC FESTIVAL 2023」ソリストとして出演。新国立劇場合唱団メンバー。



©上野隆文

合唱 新国立劇場合唱団(合唱指揮: 富平恭平)

New National Theatre Chorus (Kyohei Tomihira, chorusmaster)

新国立劇場は、オペラ、バレエ、ダンス、演劇という現代舞台芸術のためのわが国唯一の国立劇場として、1997年10月に開場した。新国立劇場合唱団も年間を通じて行われる数多くのオペラ公演の核を担う合唱団として活動を開始。個々のメンバーは高水準の歌唱力と演技力を有しており、合唱団としての優れたアンサンブル能力と豊かな声量は、国内外の共演者およびメディアからも高い評価を得ている。

コラム

マクベスを魅わせた言葉とは——



第1幕、森の中。魔女たちがマクベスに呼びかける。

「幸あれ マクベス グラミスの領主!」
「幸あれ マクベス コーダーの領主!」
「幸あれ マクベス スコットランド王!」

続いて魔女たちはバンクォーに語りかける。

「マクベスに勝るとも劣らぬ栄光!」
「幸福は より大きいだろう」
「歴代の王の親となるだろう」

——これを聞いたマクベスは動揺する。



第3幕、再び森。魔女たちが呼び寄せた幻影がマクベスに語りかける。

「マクダフに気をつけろ」
「残忍になるがいい。女から産まれ落ちた者は お前を倒せない」
「心を強く持つがいい。バーナムの森が攻めてくるまで お前は無敵だ」

しかし「バンクォーの子孫が王座につくのか?」というマクベスの問いに、魔女たちは答えない。マクベスは破滅へと向かっていく。

楽曲紹介

解説=小畑恒夫

ヴェルディ 歌劇『マクベス』

■作品の成立背景

オペラ『マクベス』(1847)はジュゼッペ・ヴェルディ(1813-1901)の作品としては初期に属するが、『ナブッコ』(1842)や『エルナーニ』(1844)とともに例外的な傑作とされる。『マクベス』は若きヴェルディが敬愛するシェイクスピア作品に初めて挑んだ成果だった。音楽の構想と斬新さは当時の常識をくつがえすもので、その意味では晩年の傑作『オテロ』にも匹敵する。ここでは作品の成立過程を見ておこう。

『ナブッコ』で大成功を収めたヴェルディのもとにはオペラの注文が殺到した。ヴェルディは北イタリアのみならず、遠いナポリやロンドンの劇場とも契約して多忙な作曲活動を展開するが、9作目の『アッティラ』(1846)でついに過労に倒れ、医師から6カ月の完全休養を命じられた。ヴェルディはレコアーロへ温泉治療に行くなど数カ月は作曲から離れる。しかしこの時期にドイツ、フランス、英国の最新の文学事情を仕入れ、読書に多くの時間を費やしたことは、オペラに新しい題材を求めていたヴェルディに豊かな実りをもたらした。

そこへフィレンツェの興行師ラナーリから新作オペラの依頼が来た。契約歌手のなかに一級のテノールがいないことを知ったヴェルディは、手持ちの題材の中からシェイクスピアの『マクベス』を選んだ。なぜなら題名役がバリトンにふさわしい。さらに興行師ラナーリは衣装と舞台装置の工房も経営していたので、シェイクスピアらしい舞台が実現できると考えたようだ。

ヴェルディは当時のイタリアではまだあまり理解されていなかったシェイクスピアに熱中し、その作品を熟読していた。彼は作品のよさが損なわれないよう自分でオペラ台本の構想を練り、気心の知れた詩人ピアヴェに韻文台本を依頼した。さらにピアヴェにシェイクスピアの演劇的效果を説明し、力のある言葉を選んで書いてほしいと再三書き直しを命じている。

オペラは1847年3月14日にフィレンツェのペルゴラ劇場で初演された。当時としては異色の内容であったにもかかわらず、『マクベス』は大きな成功を収めた。ちなみにヴェルディは、1865年にリリック座でパリ初演が行われる際にこのオペラをフランス風に改訂した。本日の公演はこの改訂版からバレエを除いたものである。

■あらすじ

スコットランドの武将マクベスは森の中で魔女たちから「将来国王になる」と予言される。マクベスは権勢欲にとりつかれた夫人と共謀し、自分の手で国王を殺して王冠を手に入れる。しかし予言は一緒にいた武将バンクォーにも「子孫が国王になる」と語っていた。禍根を断つためにマクベスはバンクォー父子の暗殺を企む。子どもは打ち損じるが、犯行直後、マクベスは血まみれのバンクォーの亡霊を見て動転し、宮廷で大失態を演じる。不安に駆られたマクベスは再び魔女に未来を尋ね、新たな予言に翻弄される。王座を守るために彼は政敵の殺戮を繰り返す。人心は離れ、国は荒れたが、もはや後戻りできない。亡命していた王子マルコムと武将マクダフがイングランドの援助をうけて反旗を翻した。王宮ではマクベス夫人が良心の呵責から夢遊病になり、衰弱して死んでしまう。残されたマクベスは反乱軍を迎え撃つも、戦場で命運が尽きる。



パリ、リリック劇場での『マクベス』1865年改訂版のスケッチより(第1幕第2場)

■楽曲解説

第1曲 前奏曲

短い前奏曲はオペラの主題に基づく。木管楽器のユニゾンによる素朴なメロディ【譜例1】は第3幕冒頭の魔女の出現場面から、オーケストラの劇的な全奏は同幕の亡霊出現からとられている。この序奏に続く音楽は、第4幕マクベス夫人の「夢遊の場」のメロディ【譜例2a & 2b】を交響的に発展させたもの。悲劇的な曲調はこの運命的なドラマへの導入にふさわしい。

【譜例1】

ALL.^o ASSAI MOD.^{to}

【譜例2a】

【譜例2b】

第1幕

第2曲 導入曲

スコットランドの森の中。魔女たちが陽気に騒いでいる[合唱]。将軍マクベスとバンクォーが通りかかると、魔女たちは——オーケストラの不気味な響きを背景に——それぞれに3つの謎めいた言葉をかける。彼女たちは、マクベスをグラミスの領主と言い当て、彼がやがてコーダの領主になり、さらにスコットランドの王になると予言する。一方バンクォーには、子孫が王になると言う。そこへ突然王の使者が登場し「コーダの領主が反逆罪で斬首され、領地はマクベスに託された」と伝える。魔女は未来を言い当てられるのか? 2人の将軍は複雑な思いを独白する[小二重唱]。マクベスたちが去ると、魔女は再び陽気に騒ぎながら消える[合唱]。

第3曲 マクベス夫人のカヴァティーナ^[注1]

城を守っていたマクベス夫人は、魔女の予言を知らせる夫からの手紙を読む。夫人の心には王座への野望が燃え上がる。夫に決断を迫ろうと歌うカヴァティーナ「さあ早く戻っていらっしやい」は強烈なエネルギーに満ちている。使者が今夜マクベスとダンカン王が城に泊まることを告げると、夫人は狂喜してカバレッタ^[注2]「地獄を治める者たちよ、立ち上がれ」を歌う。広い音域をアジリタ^[注3]で駆けめぐる技巧的な曲で、権勢欲にとりつかれた夫人の精神状態が示される。

第4曲 レチタティーヴォと行進曲

夫人は帰城した夫に国王暗殺をそそのかす(夫妻の会話はレチタティーヴォ)。バンダが行進曲を演奏し、国王(黙役)の到着と人々の歓迎を暗示する。

第5曲 シェーナ^[注4]とマクベス夫妻の二重唱

夜、マクベスは短剣の幻を見る。シェーナ「俺の前に短剣が!」は国王殺害を決断するモノローグで、音楽は創意工夫に満ちた劇的なもの。夫人が首尾を案じていると、王の寝室から血まみれの短刀を手にしたマクベスが震えながら出てくる。二重唱「宿命の妻よ」は恐怖に震える夫と彼を必死に励ます夫人の緊迫した会話。気丈な夫人は血まみれの短剣を死体のそばへ戻しに行く。二重唱は急速なカバレッタ「別の場所へ行きましょう」に入り、マクベスは夫人に引きずられるように退場する。

第6曲 第1幕フィナーレ

マクダフとバンクォーが登場。王の寝室に入ったマクダフが惨事を発見し、皆を

9/15

9/17

9/19

呼び集めて王の暗殺を伝える。驚き恐れる全員によるコンチェルト^[注5]「**地獄よ、口を開けろ**」は、無伴奏のパッセージを含み、フィナーレにふさわしい壮大な効果を上げる。

第2幕

第7曲 シェーナとマクベス夫人のアリア

王子マルコムは危険を感じて逃亡し、王冠はマクベスに託された。王になるという予言は成就したが、まだ「バンクォーの子孫が王になる」という予言がある。マクベス夫妻はバンクォー父子の殺害を決意する。夫人のアリア「**光は衰え、灯火も消え**」は自由な形式で書かれ、半音階技法を多用して彼女の邪悪な思いを強調する。

第8曲 刺客の合唱／バンクォーのシェーナ

闇の中でバンクォー父子を待ち伏せる刺客たちの合唱。バンクォーは不吉な雰囲気を感じながらロマンツァ^[注6]「**空から闇が降りてくるようだ**」を歌う。刺客たちが父子を襲うが、息子（黙役）は逃がしてしまう。

第9曲 祝宴、幻影、第2幕フィナーレ

城の広間。臣下たちを集めた華やかな祝宴が進行する。夫人が「**杯を満たしましょう**」と乾杯の音頭を取る。刺客の一人が広間の隅にマクベスを呼び、バンクォー殺害と息子を取り逃がしたことを報告する。自席に戻ろうとしたマクベスは、そこに血まみれのバンクォーの幻影を見る。彼は錯乱し、「**あの亡霊は俺の血を求めている**」と叫ぶ。ここからフィナーレのコンチェルトが始まる。夫人は場を繕おうとするが、恐怖におののき錯乱する国王の様子に、臣下たちの忠誠心は揺らぐ。

第3幕

第10曲 魔女の合唱

暗い洞窟。嵐を描写するオーケストラに続き、大釜の周りで魔女たちが「**盛りのついた雌猫が三度鳴く**」と合唱する。この後のバレエ音楽は本公演では演奏されない。

第11曲 レチタティーヴォ、幻影、ダンス曲、フィナーレの二重唱

マクベスが登場し、自分の運命を教えてくれと頼む。魔女は幻影たちを呼び出して語らせる——「**マクダフに気をつけろ**」「**女から生まれた者はお前を傷つけら**

れぬ」「バーナムの森が向かって来ぬ限り無敗」。この予言にマクベスは喜ぶ。しかし「バンクォーの子孫は王になるのか」と尋ねると、魔女たちは歴代8人の王が行進する幻影を見せ、マクベスの王位が断絶することを示す（本公演では王たちの行進はカットされる）。マクベスは恐怖のあまり気絶する。この「幻影の場」は明確なかたちを持たず、ドラマにふさわしい断片的な音楽が効果的に使われる。精霊たちがマクベスを慰めるように踊り、魔女たちが静かな合唱を歌う。魔界が消えるとマクベスが目を覚まし、彼を探しに来た夫人との二重唱「今こそ復讐の時」になる。夫妻はマクダフの家系を滅ぼし、バンクォーの息子を殺すことを決意する。

第4幕

第12曲 合唱

イングランドとスコットランドの国境付近の荒野。集まった難民たちが「虐げられた祖国よ!」と暴政によって乱れたスコットランドの惨状を嘆く。この極めて繊細な合唱はヴェルディが書いた最高の合唱の一つとされる。

第13曲 シェーナとマクダフのアリア

アリア「ああ、父の手はお前たちを守ってやれなかった」は、祖国に残した妻と息子たちを殺されたマクダフの悲痛な歌。そこへイングランドの援助を得た王子マルコムが軍隊を率いて到着する。祖国奪還に動く王子にマクダフは忠誠を誓う。ここではカバレッタに代えて勇壮な合唱「裏切られた祖国が泣いて我らを招く」が歌われる。

第14曲 マクベス夫人の夢遊の場

前奏曲で聞いた2つのメロディ【譜例2a & 2b】が再現される。罪の意識に苦しむマクベス夫人は夢遊病になって夜の城内を歩き回っていた。侍女と医者が隠れていると、ロウソクの火を手に夫人が現われる。「まだここに血の染みがひとつ」で始まる夫人のモノローグは、初期ヴェルディの最高のアリアと言っても過言

【譜例3】



ではない。アリアはオーケストラの不気味な音型に支えられる【譜例3】。医者は夫人の断片的な独白から、彼女がダンカン王殺害にかかわったことを確信する。

第15曲 シェーナ、戦い、フィナーレの賛歌

マルコムがイングランドと結託して攻めて来ると知らされてマクベスは激怒する。しかし彼の唯一のロマンツァ「**哀れみも、名譽も、愛も**」には予想される不幸な余生への悲哀の感情がある。そこへ夫人の死が伝えられ、さらにバーナムの森が動き始めたとの報告が届く。マクベスは覚悟を決め、軍勢を率いてマルコム軍を迎え撃つ。戦いの間、オーケストラはフーガ風の戦闘音楽を演奏する。戦場でマクダフと一騎打ちになったマクベスは、「女から生まれた」のではなく「帝王切開で引き出された」マクダフに斬り殺される。王冠はマルコムに託された。人々は「マクベスはどこだ、あの王位篡奪者は？」で始まる壮大な「勝利の賛歌」を歌う。

[注1]カヴァティーナ：登場人物が最初に歌う「登場のアリア」。

[注2]カバレッタ：二部構成のアリアの後半部。速いテンポで歌唱技巧を聞かせる。

[注3]アジリタ：細かい音符の連なりを急速に歌う技巧。

[注4]シェーナ：レチタティーヴォよりも情感豊かに歌う部分。

[注5]コンチェルト：ソリストたちのアンサンブルで合唱を含む。

[注6]ロマンツァ：アリアのような形式をもたない自由な独唱曲。

[原作]ウィリアム・シェイクスピア『マクベス』

[台本]フランチェスコ・マリア・ピアヴェ、アンドレア・マッフェイ

[作曲年代] 1846～47年 【初演】1847年3月14日、フィレンツェ、ペルゴラ劇場にて、作曲家自身の指揮による 【改訂版初演】1865年4月21日、パリ、リリック劇場にて

[楽器編成] ピッコロ、フルート、オーボエ2（2番はイングリッシュ・ホルン持ち替え）、クラリネット2、ファゴット2、ホルン4、トランペット2、トロンボーン3、チンバツソ、ティンパニ、打楽器（小太鼓、大太鼓、シンバル、タム・タム）、ハープ、弦楽5部

[バンド] オーボエ、クラリネット、ファゴット、トランペット、打楽器（本公演では舞台上のオーケストラ奏者が演奏する）

おばた・つねお／昭和音楽大学客員教授、NPO日本ヴェルディ協会理事長。「音楽の友」「レコード芸術」などで音楽評論活動を展開。著書に『ヴェルディ（作曲家・人と作品）』『ヴェルディのプリマドンナたち ヒロインから知るオペラ全26作品』『つながりと流れがよくわかる 西洋音楽の歴史』（共著）、訳書にニコラーオ『ロッシーニ 仮面の男』など。

シェイクスピア『マクベス』によせて

Anecdotes on *Macbeth*



作曲家ジュゼッペ・ヴェルディの書簡より

「この悲劇(《マクベス》)は、人間のもっとも偉大な創造物のひとつです! 傑作は作れないまでも、せめてありきたりでないものを作りましょう」(台本作家ピアヴェにあてて)

「《マクベス》はすばらしいものになるでしょう。そう思うと興奮します[……。]このオペラはイタリア音楽に新しい傾向を打ち出し、現在と将来の作曲家たちに新しい道を拓くことでしょう」(興行主ラナリーにあてて)

小畑恒夫「作曲家◎人と作品シリーズ ヴェルディ」(音楽之友社)より



特別対談 松岡和子×小畑恒夫 〈ヴェルディ／歌劇『マクベス』を知る〉より

「オペラを従来の形ではなく全てを総合した音楽ドラマにしたいと考えたのは、ヴェルディのこの『マクベス』が最初です。その意味でこの作品はやはり特殊な作品で、これを書いたか書いていないかで後のヴェルディは大きく違ったという感じがします」

(音楽学者・音楽評論家／日本ヴェルディ協会理事長 小畑恒夫 談)

「私はシェイクスピアの戯曲を37本全て訳してきましたけれど、『マクベス』が一番好きかもしれない。まず言葉がとても特別なですね。どの一行も厳選され、そこにすごいイメージが乗っていて、そういう言葉で作られた人格、性格というのがびっくりするくらい面白い。

マクベスが宴の前に独白する『一旦手をつけた悪事の土台を固めるには悪事を重ねるしかない』——つまり「もう後戻りできないところに行ってしまった」、これが私はこの夫妻の最大の悲劇だと思えます。取り返しのつかないことをやってしまった、もう先へ行くしかないのだという、これは、たとえ王位に関心がない、人を殺したこともない私でもやっぱり共感できるところがあるのです」(翻訳家・演劇評論家 松岡和子 談)



▶両氏の対談は東京フィルYouTubeチャンネルでご覧いただけます